

二〇〇九年 センター漢文 解説速報

【全体解説】

今年の問題は、難易度としては昨年度とほぼ同じ。人によっては少し難しく感じたかもしれないが、それでも想定範囲内であろう。昨年同様、論説系の文章なので、主題とその展開を捉えることがポイントとなる。段落は、一見二つに見えるが、よく見ると本文二行目も一字下げているので、実は三段落からなる。つまり第一段落は、一行のみ。となれば、これが主題の提示であることは誰でもすぐ気がつくであろう。となれば、当然第二段落は、最初に提示された主題の論証部分である。そして「吾觀」で始まる第三段落は、この主題を受けての筆者の結論であろうと、大体の展開が読める。これまで幾度も読んできた文章のパターンであり、けっして難しくはなかったはずである。

各段落の内容は、人名や地名などやたらに固有名詞が出てくることを除けば、それほど難しいものではない。落ち着いて考えれば、迷うような問題はほとんどなかったと思う。ただ、新傾向の設問もあつたので、必須の「十五分間」を確保できなかった受験生は、少し焦つたかもしれない。いずれにしろ、最高配点の問六を間違えたとしても四〇点であり、得点八割が一応の目安となろう。もちろん、満点は充分可能である。

【設問解説】

昨年度から設問のスタイルがかなり変わったが、それは今年度もほぼ踏襲された。漢字の問題は、昨年は読みを問うものであつたが、今年の意味でも読みでもなく、熟語の意味を問うものとなつた。また、問四は、一文ごとの内容を問う新傾向の問題であつた。従来あまり見ないタイプの問題であり、ちよつと面食らつたかもしれない。恒例の内容合致問題はなくなつたが、問五と問六が実質的に内容合致を問うものであり、大きな変化はないといえよう。

問1 形としては漢字の熟語の意味を問う問題のように見えるが、実は文脈上の意味を問う問題。

(1)は「師を窮め武を黷し、殆ど寧歳無し」と言っているのだから、「安寧」といった熟語が思い浮かべば、「平和な年」であると容易に想像がつくだろう。(2)の方も、呉王と秦の苻堅を較べて「相ひ類す」と言っているのだから、「互いに似ている」だと誰でもわかる。

問2 返り点がついているので、構文は簡単にわかる。「亡国の罪を以て、西施に帰す」と言っている。ところが、前の文で「西施が呉を亡ぼしたのではない」と言っているのだから、「而」が逆接で、最後の「過矣」が「あやまつ

である」ということは容易にわかる。よって、書き下しは①が正解。書き下しが選べれば、解釈は簡単。「間違っている」と訳しているのは④しかない。

問3 (イ)が少しわかりにくいだが、(ア)と(ウ)から絞っていけるだろう。(ア)は「西施は一嬪嬙のみなれば」と言っているのだから、西施であるはずわかる。(ちなみに、「使」を「もし」と読んでいるのは、本来「呉王をして…しめば」という〈反実仮想〉の形だったね。)よってまず③と⑤に絞る。(ウ)は自動的に呉王となる。つまり「而るに乃ち遠く數千里に出て、長を黃池の間に争うのが呉王であつて、「越人其の空虚に乗じて其の巢穴を傾く」と言っているのだから、「臥薪嘗胆し、日に其の後を伺ふ」のは越王句踐でなければならぬ。よって③が残る。

問4 従来あまり見たことがない新傾向の問題。段落を一文ごとに切つて、それぞれの表現と内容を問うというもの。やり慣れていないので面食らつたかもしれないが、要は一文ごとの内容合致問題なので、間違いを見つけて消してゆく消去法しかないだろう。①は「呉の滅亡は呉王にこそ求めるべきである」というのは「従来の見解」ではないので×。②は「越の軍隊を攻撃するために、呉がひそかに力を蓄えていた」というのは、事実と逆だから×。③は「呉と越の戦いを具体的に列挙して」いないので×。④は「呉を滅ぼすことは小動物を捕らえるように容易であつた」というのがポイントはずれなので、たぶん×だけど、一応⑤をチェック。⑤は「即ち西施無くとも、豈に亡びざる者有らんや」というのは、たしかに仮定形と反語形だし、「呉の滅亡に対する従来の見解を否定し、筆者自身の意見を強く主張している」というのは、まさにこの段落の締めくくりの文としてふさわしいので、あきらかに正解。実は、それほどむづかしい問題ではない。

問5 やや難。「呉王と苻堅の歩んだ道は同じであつた」とあるが、選択肢をざつと見ると、二人の「個人の資質」と「結末」を比較していることがわかる。秦も呉も亡びたと書いてあるので、「結末」が同じであるのはあきらか。とすれば問題は「個人の資質」が同じであつたかどうかになる。まず、③は「結末が違う」と言っているので真つ先に消える。ついで、②と④は、「いずれも優れた人物を殺害し」と言っているが、苻堅の方にはそのような記事は見えないので、これも消える。とすると、①と⑤の二択となる。①は「資質も結末も同じ」、⑤は「資質は違ふが、結末は同じ」、さてどちらか。①の「歡樂にふけて民を顧みず、隣国の攻撃に対する備えを怠つた」のは、呉王には当てはまる

が、苻堅についてはそのようなことは書かれてない。さらに気になるのが、「二君の荒淫と精明とは、固より年を同じくして語るべからず」という文である。(注)によると「荒淫」は酒色に溺れる、「精明」は聡明の意であり、荒淫と精明が両立するとは考えがたい。とすると「二君の荒淫と精明」と言っているのは、「一方の君は荒淫で、もう一方の君は精明」ということであると思われる(実際は苻堅の方が精明)。とすれば、二人の個人の資質には違いがあると言っているわけで、⑤が正解と言うことになる。

問6 「筆者の意図の説明」を問う形になっているが、選択肢を見ると結局は本文の主旨を問うものと考えてよいだろう。この文章の前半は、呉を滅ぼしたのは西施ではなく、有能な臣下を殺し、内政を疎かにして、国外での戦争に明け暮れた呉王の責任であると言っている。後半は、秦の苻堅と比較して、武力に頼って遠征した挙げ句、自国の政治が疎かになって滅亡したところに共通点を見出している。そこから「遠きを攻むる者は近きを遺る」という格言が引かれるわけである。

これも、基本的には内容合致問題なので、まずあきらかに間違っているものを消してゆく。②は「越王とその臣下らの巧みな策略による」というのが間違っている。③は「為政者として強大な軍隊を統御し続けること」というのが、ピンとはずれで×。⑤も「容易には理解できない深遠な理由に基づく」というのが見当違いで×。①か④の二択となる。①は「呉王の事跡および呉王と苻堅との比較を通じて、呉国の滅亡は、呉王の為政者としての資質にその原因があったことを」までは完璧に合っている。ただ問題は「教訓や格言を引用して論証しようとしている」という箇所。論証は、第二段落で済んでいて、格言は論証のために用いたわけではない。一方④の方は、「為政者として軍事力を安易に行使用すると必ず自滅を招くことになり」と、呉王や苻堅の名前を出さずに一般化して述べている。

ここで、もう一度、**センター試験の内容合致問題の解法**を思い出そう。95%合っている、一箇所でも違っていたら、それは正解ではない。なんかいまちはっきりしない言い方をしていても、間違っていないければそれが正解であった。センターの出題者は、よく正解をわざとぼかしてわかりにくくし、代わりにほとんど合っているように見えて一箇所だけ違うダミーを入れておく。そうすると、多くの受験生が面白いようにダミーに飛びつくのである。この設問も、完全にそのパターンである。

というわけで、正解は④。時間が無くて、最後まできちんと読まないと①を選ぶ羽目になる。

【書き下し文】

西施能く呉を亡ぼすに非ざるなり。而るに後世亡国の罪を以て之を西施に帰するは過てり。

使し呉王宰 嚭を信じて伍胥を殺さず、内は国政を修め外は敵人に備へば、西施は一嬪 嬙のみなれば、何をか能く為さん。当時句踐の堅忍、種・蠡の陰計を以て、臥薪嘗胆し、日に其の後を伺ふ。而るに乃ち遠く数千里に出て長を黄池の間に争ひ、鬻を艾陵の上に構へ、師を窮め武を贖し、殆ど寧歳無し。越人其の空虚に乗じて其の巢穴を傾く。此れ即ち西施無くとも、豈に亡びざる者有らんや。

吾呉の亡ぶるを觀るや、秦の苻堅と相ひ類す。二君の荒淫と精明とは、固より年を同じくして語るべからず。而れども秦の亡ぶるは晋を伐ち潰ゆるを致すを以てし、呉の亡ぶるは境を越えて内救及ばざるを以てす。其の轍は一なり。然る後に「佳兵は自ら焚きて」「遠きを攻むる者は近きを遺る」、元龜・格言の必ず易ふべからざるを知るなり。

【現代語訳】

西施が呉を亡したのではない。それなのに後世の人が、亡国の罪を理由に、呉の滅亡を西施のせいにするのは誤っている。

もしも呉王が、宰 嚭の言うことを信じて伍子胥を殺すようなことをせず、国政をきちんと修め、外敵に備えていたら、西施は一宮女にすぎないのだから、いったい何ができたであろう。当時越は、句踐の我慢強さと文種・范蠡の密かな計略によって、臥薪嘗胆して、日々その後の機会を窺っていた。しかし呉王はといえば、遠く数千里の彼方に出兵して黄池で諸侯と明主の座を争い、艾陵の地で犠牲を捧げて戦端を開き、軍隊を頻繁に出動させては兵力を濫用して、ほとんど平和で安寧な年はなかった。越人はそのすき乗じて、呉の本国を攻めて傾けたのだ。これでは、たとえ西施などいなくても、どうした亡びないことがあっただろうか。

私は、呉が亡びたのを観ると、秦の苻堅とよく似ていると思う。呉王と苻堅、二人の君主の荒淫と精明とは、もとより年代を同じくして語ることができないのではない。けれども、秦が亡びたのは、晋を攻撃して大敗したのが原因であり、呉が亡びたのは、国境を越えて戦争にふけり内政が及ばなかったからである。その踏んだ轍は同じである。これによって「優れた兵器は自らを燃やす」「遠きを攻める者は近きを忘れる」といったことわざや格言は、決して変わることはないことがわかるだろう。(文責・漢文担当 門屋 温)